

教員養成課程における声楽実技指導の実践研究

～新学習指導要領に基づくルーブリックの作成と検証～

諏訪 才子*

A Practical Study of Vocal Skill Instruction in the Teacher Training Course

～ Development and testing of the Rubric based on the New Course of Study ~

Saiko SUWA*

Key words : 声楽実技

ルーブリック

評価アンケート

新学習指導要領

教員養成課程

Vocal Skill

Rubric

Evaluation Questionnaire

New Course of Study

Teacher Training Course

1. はじめに

2016年、中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』では、新・教育課程において各校共通して育成を目指す資質・能力として、3つの柱を軸においた。この3つの重要な柱は、①生きて働く「知識・技能」の習得、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養、である。そして、この能力を養うためには、「主体的・対話的で深い学び」が必要とされた。さらに、大学においては、既に能動的・主体的な学修への質的転換が図られ、また、初等中等教育と高等教育は各教育段階の特質や独自性、有効性を生かしたプログラムを構築しながら、共通の視点をもって連携していくことが求められている。

本研究は、これらのことを鑑み、大学教育における「主体的に考える力」及び新学習指導要領のキーワードである「3つの柱」と「主体的・対話的で深い学び」に基づいて、教員養成課程における声楽実技のためのルーブリックを作成するとともに、この内容を細分化したアンケートを用いた

指導を行い、作成したルーブリックの使用方法与有効性を検証することを目的とした。

2. ルーブリックの作成

2.1 パフォーマンス評価としてのルーブリック

ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリックス方式で示す評価指標である。さらに、学習者の「パフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される、評価基準の記述形式」と定義される評価ツールのことと述べられている¹。

芸術分野における演奏・作品などのパフォーマンスは、個人の感性や音楽経験に拠るところが大きく、スキルアップに必要な具体的な内容や評価については抽象的で個人差が生じる傾向にある。また、芸術の特質上、その専門性の追及において、課題や評価規準（観点）、尺度（達成レベル）、評価基準（パフォーマンスの具体的な特徴）は、無限大で千差万別であり、設定が困難となる。このことから、ルーブリックは、定性的評価の可視化・尺度化という点で、芸術の評価に適している

* 東北女子大学

と考える。特にここでは教員養成課程における声楽実技のためのルーブリックと位置付けて、成績評価として用いるのではなく、歌唱法の基礎・基本を修得する目的で作成した。このためこのルーブリックでは、①学修目標・内容の具体化・可視化、②教員と学修者が共有して、共通した認識のもとに学修を進めること、③ルーブリックに基づいたアンケートを使用して自己評価による振り返りを行い、新学習指導要領における資質・能力の3つの柱を、主体的な学修によって身につけること、④学修者同志も学修目標などを共有し、協働により学修を深化させること、の4点に注目した。

2.2 声楽実技のためのルーブリック作成

声楽実技のルーブリックの観点や尺度を以下のように設定した。作成に当たり、横溝ほか(2018)、小山ほか(2016)の声楽を含む音楽実技のルーブリックに関する先行研究を参考とした。

観点は、新学習指導要領における小学校から高等学校までの各教科共通の評価観点である知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度、の3つに基づいて設定した。ここでは、知識と技能を分けて、1.知識、2.技能、3.表現、4.主体的に学習に取り組む態度の4観点とした。4.主体的に学習に取り組む態度については、新学習指導要領の3本柱を主体的な学修により身につけること、将来、教員となる学生が、評価観点の基本を把握する、という点から組み入れた。

1～3の観点は、具体的な内容の小項目からなり、1.知識は、読譜力(音程、リズム、拍子感などの音楽的要素)と楽曲の解釈(音楽様式や歌詞の理解)、2.技能は、発声(姿勢・呼吸・共鳴など)と歌詞の発音(ディクション、母音・子音など)、3.表現は、演奏表現(音楽的表現、歌詞の内容表現)と完成度(暗譜、伴奏合わせ)、ステージマナーで構成した。更に、4観点の他に総合評価を加えた。小項目を含めた具体的な観定の計8項目は、基本的な1曲の歌唱曲を仕上げるために必要となる主な学修内容を網羅的に設定し、学修者に、学修内容の全体像を把握させ、テキストに

準ずる指針とした。

音楽は、一つの基礎的な技能を体得するまでに、一定の時間と着実な練習量が必要となる。尺度は、学修者が段階を踏んで少しずつ技能を修得しながら次の目標に進むことができるように、A「大変素晴らしい」、B「十分できる」、C「まあまあできる」、D「一部はできる」、E「初歩的な基礎学習ができる」の5段階に設定した。

また、ルーブリックの記述方法について、高瀬(2014)は、否定形と肯定形が混在すると到達度の判断に迷うことや否定形の使用を避けることを今後の課題に挙げている²。そこで、今回は、尺度や評価基準の全てにおいて、「できない」「乏しい」などの否定形を入れず、「できる」という肯定形のみを使用した。これにより、学修者は、ステップアップのみを目指して、モチベーションを高く保ちながら学修に取り組むことができる(表1)。

3. 声楽実技レッスンの実践

3.1 声楽実技レッスンの実施(対象と方法)

平成30年度、本学児童学科4年生1名、3年生2名、計3名の学生(以下、学生A、B、Cとする)を対象に、声楽レッスンを実施した。レッスンは平成30年7・8月に計6回行った。課題曲は、本学で開講されている科目〔音楽表現Ⅱ(声楽)〕における既習曲の中から、各自、任意の1曲を選択した。3名ともイタリア古典歌曲を選択し、学生Aが、Nina(Giovanni Battista Pergolesi作曲)、学生Bは、Sebben crudele(Antonio Caldara作曲)、学生Cは、Caro mio ben(Giuseppe Giordani作曲)である。

事前に、作成したルーブリック評価表を学生に提示し、評価観点(学修規準)や評価尺度(学修到達レベル)、評価基準を確認した。また、ルーブリック評価の内容を細分化した項目による評価アンケート(資料1)を作成し、教員、学生ともに毎回のレッスンで使用した。評価は5段階で、ルーブリックの評価尺度に即した記述語を用いた。更に、毎回、学生は、6項目についてのレッ

表1 声楽実技のためのルーブリック

観点	A 大変素晴らしい	B 十分できる	C まあまあできる	D 一部はできる	E 初歩的な基礎学習ができる	
知識	読譜力 (音程・リズム・拍子感等)	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことができ、かつ音楽性を備えている。	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことが十分できる。	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことが概ねできる。	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことが、部分的にできる。	音楽的要素を理解して、ピアノの単音補助をつけて、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことができる。
	楽曲の解釈 (音楽様式 の理解・歌詞の理解)	音楽様式と歌詞の内容を深く理解して、説明することができる。	音楽様式と歌詞の内容を十分理解している。	音楽様式と歌詞の内容を概ね理解している。	音楽様式と歌詞の内容を部分的に理解している。	音楽様式や歌詞の内容について、参考資料を基に調べることができる。
技能	発声 (姿勢・呼吸・共鳴等)	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて深く理解して、説明を加えて、音楽性豊かに実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて十分理解して、実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて概ね理解して、実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて部分的に理解して、実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて、参考資料を基に調べることができる。
	歌詞の発音 (母音・子音等)	日本語や外国語による歌詞を、自然に美しく、正しい発音・ディクชันで歌うことができる。	日本語や外国語による歌詞を、正しい発音・ディクชันで歌うことが十分できる。	日本語や外国語による歌詞を、正しい発音・ディクชันで歌うことが概ねできる。	日本語や外国語による歌詞を、正しい発音・ディクชันで歌うことが部分的にできる。	日本語や外国語による歌詞の発音・ディクションについて、参考資料や音源を基に声に出して読むことができる。
表現	演奏表現 (音楽的表現・歌詞の表現)	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、創意工夫して、大変表情豊かに表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、創意工夫して、十分表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、概ね表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、部分的に表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、参考資料や音源を基に理解することができる。
	完成度 (暗譜・伴奏合わせ)	暗譜は体得されていて、歌とピアノ伴奏の音楽性も非常に一体化した、大変完成度の高い表現ができる。	暗譜していて、歌とピアノ伴奏の音楽性が一致した十分完成した表現ができる。	暗譜、歌とピアノ伴奏の音楽性が一致した表現が概ねできる。	暗譜、歌とピアノ伴奏の音楽性が一致した表現が部分的にできる。	暗譜、歌とピアノ伴奏の音楽的な合わせに取り組むことができる。
	ステージマネージャー	大変丁寧で、美しく品格のあるステージマネージャーを身につけている。	丁寧で、基本的なステージマネージャーを十分身につけている。	基本的なステージマネージャーを概ね身につけている。	基本的なステージマネージャーを部分的に身につけている。	基本的なステージマネージャーを理解することができる。
主体的に取り組む態度	自ら歌唱曲を選択し、知識・技術・表現などの課題を解決しながら、音楽的に大変豊かに表現することができる。	自ら歌唱曲を選択し、知識・技術・表現などの課題を解決しながら、音楽的に表現することが十分できる。	指定された曲の中から歌唱曲を選択し、知識・技術・表現などの課題を解決しようとしながら、音楽的に歌唱することが概ねできる。	指定された曲の中から歌唱曲を選択し、知識・技術・表現などの課題を解決しようとしながら歌唱することが部分的にできる。	指定された曲の中から歌唱曲を選択し、知識・技術・表現などの初歩的な課題に取り組むことができる。	
総合評価	印象に残る大変魅力的な演奏ができる。	十分に良い演奏ができる。	基本的な歌唱が概ねできる。	基本的な歌唱が部分的にできる。	歌唱の初歩的な学習ができる。	

資料1 評価アンケート

声楽レッスン・(聴講) アンケート

5…大変素晴らしい 4…十分にできている 3…まあまあできている

2…一部はできている 1…初歩的な段階である

1. 音楽的要素(音程・リズム・拍子感など)を、正確に歌うことができたか。
2. 音楽様式や歌詞の内容を理解していたか。
3. 自然な良い姿勢、美しい立ち姿で歌っていたか。
4. 呼吸法、ブレスは、適切にできていたか。
5. 口の開き方や顔の表情など、発声上の留意ポイントは適切にできていたか。
6. 全体に、自然で無理のない美しい響きのある発声であったか。
7. 全体に、声量は豊かであったか。(音域による違いも判断基準に含めてください。)
8. 全体に、よく通る響きのある声であったか。(音域による違いも判断基準に含めてください。)
9. 歌詞の発音は、正しくかつ明瞭であったか。
10. フレージングなどメロディーの音楽的表現、また歌詞の内容は表現されていたか。
11. 暗譜、また伴奏との合わせは、十分にできていたか。
12. ステージでのマナーは、適切にできていたか。
13. 総合的に、印象に残る魅力的な演奏であったか。

資料2 声楽レッスン記録

声楽レッスン記録・レポート

1. レッスン日までの練習記録
2. 今回のレッスンで分かったこと、体感したポイント
3. できるようになったこと
4. レッスンでのキーワード
5. 歌唱曲での具体的ポイント
6. レッスンを受けての感想

スン記録(資料2)をとった。

レッスンの目的は、教員として指導するための理論や技能を修得し、歌唱の実践力や指導力を身につけ、音楽的な能力や感性を高めることである。更に、学生が主体的に歌を研究・追求し、自分の声で歌唱曲を表現して音楽のもつ豊かさ・深さを感じる喜びを体験し、自ら技能や知識を獲得していく過程の楽しさや学修方法も体得するというねらいがある。

レッスンは個人レッスンの形態であるが、他の学生のレッスンを聴講可能とした。これにより、学生が現状分析を行ったり、技能のステップアップに課題が生じた時に、直ぐに教師が指導するのではなく、他の学生からアドバイスを得て解決し

ていくという協働による学修を取り入れた。解決の困難な時には、教師が学生への質問を交えて解決方法を導く形をとった。

3.2 声楽レッスン実践の概要

以下に、レッスンの実践内容について述べる。

第1回

演奏会形式により、学生3名が、暗譜・独唱で、課題曲となるイタリア歌曲の演奏発表を行った。伴奏者は各自が用意した。初回は、現段階での歌唱の練習成果を発表する場とした。発表後、評価アンケートを使用して、自己評価に加えて他の学生に対する評価を行った。また、学生の演奏は動画により録画保存し、演奏後に自分の歌や歌唱時

の姿について客観的な分析ができるようにした。

第2回

第1回目のレッスン記録や評価アンケートから、Aは、歌詞の不明瞭や音程の不安定／ブレスが深くとれない／高音の響きが必要で、余裕をもって声をコントロールしたい、Bは、ブレスが浅い／高音での力み／低音の声・音程の不安定、Cは、息が上手く吸えない／喉が狭く、響きが集まっていない、などの課題が挙げられた。現時点で3名に共通する主な課題は、ブレスと発声上の問題の2点であったため、実質的なレッスンとなる第2回目からは、発声の基礎から取り組むことにした。

発声法の準備段階として、身体のウォーミングアップ法（ジョギング、ウォーキング、簡易な柔軟体操、腹筋運動など）及び呼吸練習の方法（息を吸い口から「スー」と無声音で息を吐ききる方法、片鼻から息を吸い数秒息を止め、吸った鼻から息を吐く方法）を提示した。今回は、基本的な発声練習と歌唱曲の母音唱法を行った。

1. 発声練習

①喉を開ける練習として「マ」「メ」「ミ」「モ」「ム」の5母音を、頭声発声により“あくび”“笑い”“驚き”の表情・態勢で声を出す。次に、「マ」の母音で3度音程の順次進行による音形（例ド～レ～ミ～レ～ド）を行った。（以下、発声練習①とする。）

②5度音程の分散和音による音形（例ド～ミ～ソ～ミ～ド）を「ミ」の母音で行った。（以下、発声練習②とする。）

2. 歌唱曲の練習

①「マ」の母音により、母音唱法を行った。（以下、歌唱曲・母音唱法①とする。）曲の最初の部分のみ歌唱した。

第3回

1. 発声練習〔発声練習①②〕と2. 歌唱曲の練習〔歌唱曲・母音唱法①〕を1曲通して行った。

第4回

基本的な発声練習と歌唱曲の母音唱法に加えて、頭声発声による歌詞の読みを行った。最後に、

歌詞により通して歌った。今回で一連のレッスンの全メニューが揃った。

1. 発声練習〔発声練習①②〕を行った。

2. 歌唱曲の練習

①〔歌唱曲・母音唱法①〕を行った。

②頭声発声による歌詞の読みを行った。（以下、歌唱曲・読み②とする。）

③歌詞により通して歌う。（以下、歌唱曲・歌詞③とする。）

第5回

一連のレッスンにおける全メニュー、1. 発声練習〔発声法の基礎練習①②〕及び2. 歌唱曲の練習〔歌唱曲・母音唱法①〕、〔歌唱曲・読み②〕、〔歌唱曲・歌詞③〕を行った。

第6回

全6回のまとめである。全メニューの確認・復習をした後、最後に第1回目と同様に、演奏会形式により演奏発表を行った。この演奏も、第1回目と同様に、再度、動画により録画し、第1回の演奏と比較検証を行った。

4. 結果と考察

学生3名の主な課題である呼吸法と発声法を中心に、作成したルーブリックに基づいた13項目からなる評価アンケートの分析と、レッスン記録の分析を行った。

4.1 評価アンケートの分析

作成したルーブリックの4観点と評価アンケート項目（資料1）との対応関係は、以下の通りである（表2）。技能に対応するNo.3～9の項目は、呼吸法を含む発声法全般に関する内容である。

（1）技能を中心とするNo.4、5、6、10、13の主要5項目を抽出して、第1回から第6回までの評価を折れ線グラフに表して、その推移の特徴を分析した（図1）。

学生A・B・Cいずれも、技能の修得過程において、伸び悩みや下降、上昇を繰り返しながらも、最終回の第6回には、第1回と比較して全員に1～3段階のステップアップが見られた。第2回目

表2 4観点とアンケート項目の対応表

観点	項目
知識	1、2
技能	3、4、5、6、7、8、9
表現	10、11、12
主体的に学習に取り組む態度	知識・技能・表現の修得過程に含まれているため、特に設定しない。

(※項目13は、総合評価である。)

に、3名の6項目の自己評価の総数18のうち、7つにおいて1段階の下降があった。これは、課題曲に対するルブリックの具体的な観点や尺度、そして基準となるその段階のパフォーマンスの内容を確認したこと、また、アンケートを用いて、改めて自己の演奏発表を詳細に振り返ることにより、演奏発表時には見えなかった不足な点を明確に把握することができたこと、の2つの理由によるものと推測できる。

3名の学生の自己評価の推移は、多少の上行下行の違いがあるものの、教師による3名に対する評価とほぼ同じ形状のラインを描き、教員による評価にも初回と比較すると、1～3段階のアップがあった。これにより全6回の教師と学生の評価判断が、概ね一致していることと、どちらにも1～3段階のステップアップがあることが分かった。

(2) 全13項目における、第1回と第6回の評価を比較した伸び率を以下にまとめて、その特徴を分析した。数値に変動のない場合を0として、そこから1～3段階アップした場合を、それぞれ、+1、+2、+3、とした(表3)。

伸び率は学生3名、教員ともに、+1、+2が最も大きく、学生A・B・C全体の自己評価では、+1が30.8%、+2が48.7%で、教員の評価では、+1が51.3%、+2が35.9%であった。教員と学生の+1と+2のパーセンテージが逆転しているが、ここには、学生Bの伸び率が反映されている。学生Bの、+1、+2における教員との数値の差分は、第1回目の教員の評価が、7項目におい

て、学生より1段階高かったためであり、図1のグラフから見る評価の推移と(3)で述べる第6回の最終評価については、他の学生も含めて、概ね一致していた。+1と+2を合計すると、学生と教員それぞれ79.5%と87.2%と、ほぼ一致する結果となった。更に、学生と教員の、+3はともに10.3%で、+1～+3までの合計はそれぞれ、89.8%、97.5%に上った。

以上のことから、全6回の教師と学生の評価のステップアップ度もおおそ一致し、また、1～3段階のステップアップの合計は、いずれもほぼ90%以上となることが分かった。

(3) 全13項目における、第6回目の最終評価について以下にまとめ、特徴を分析した(表4)。

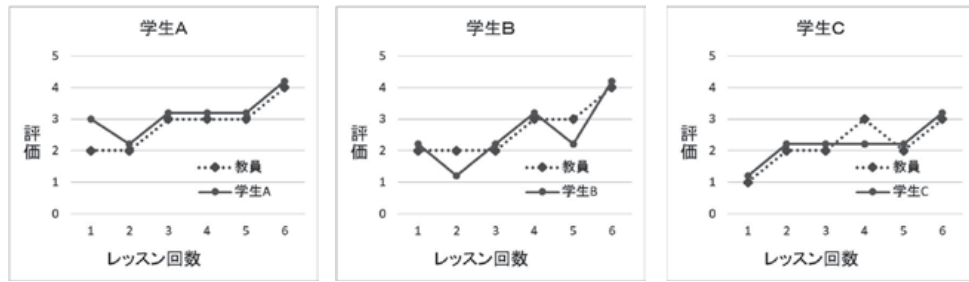
最終評価は、学生3名の総評価項目数39のうち、教員より1段階低い評価が7つ(17.9%)、教員より1段階高い評価が2つ(5.1%)、教員と同じ評価が30(76.9%)という結果であった。特に学生Cが4項目において教員より1段階厳しい自己評価であったが、学生全体では、教員と同じまたは1段階上の評価を合わせると82.0%となり、教員と学生の最終評価も、相対的に、概ね一致していることが分かった。

4.2 学生によるレッスン記録の分析

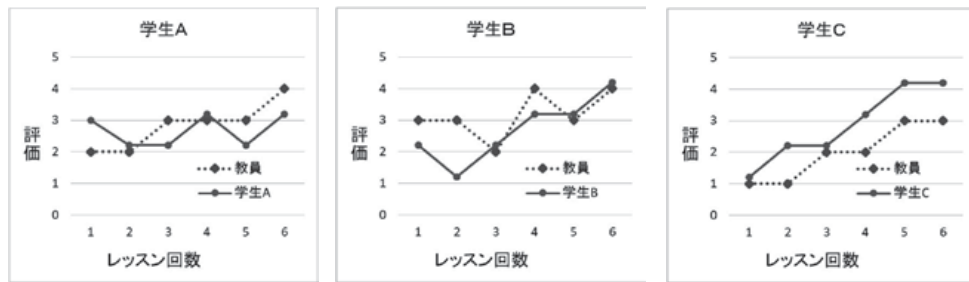
[2. 今回のレッスンで分かったこと、体感したポイント]、[4. レッスンでのキーワード]、[6. レッスンを受けての感想]から、学生3名の特徴的な記述を取り上げて分析する。

(1) [2. 今回のレッスンで分かったこと、体

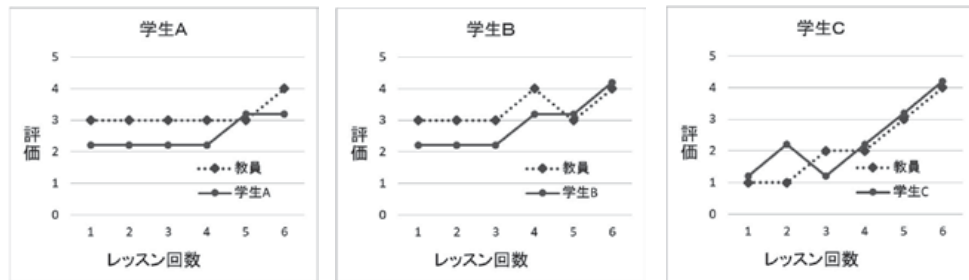
[4. 呼吸法、ブレスは、的確にできていたか。]



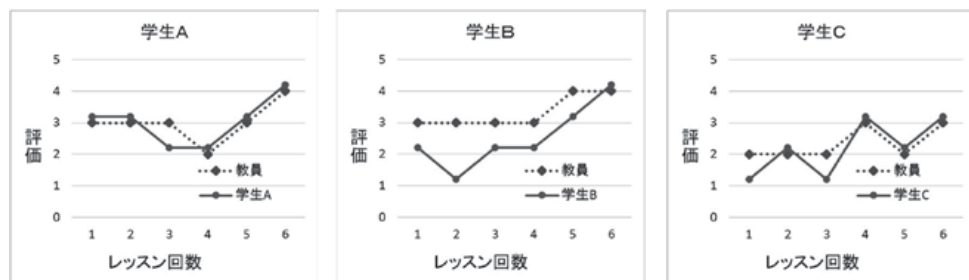
[5. 口の開き方や顔の表情など、発声上の留意ポイントは適切にできていたか。]



[6. 全体に、自然で無理のない美しい響きのある発声であったか。]



[10. フレージングなどメロディーの音楽的表現、また歌詞の内容は表現されていたか。]



[13. 総合的に、印象に残る魅力的な演奏であったか。]

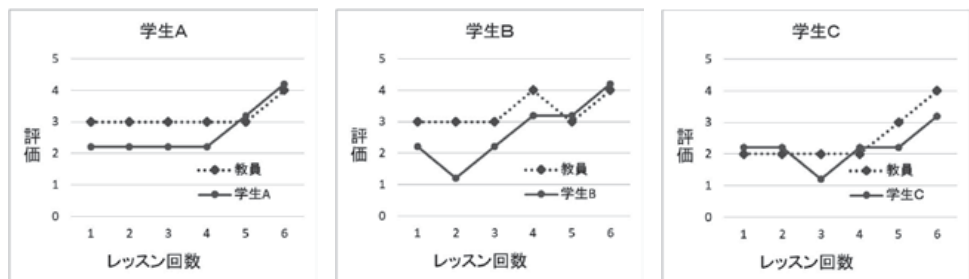


図1 アンケート項目における学生と教員の評価の推移

表3 アンケート 13 項目についての学生・教員評価におけるステップアップ度

(該当する項目数と%)

ステップアップ度/%		0	%	+1	%	+2	%	+3	%
学生 A	教員評価	0	0	7	53.8	5	38.5	1	7.7
	自己評価	1	7.7	6	46.2	6	46.2	0	0
学生 B	教員評価	0	0	10	76.9	2	15.4	1	7.7
	自己評価	0	0	3	23.1	8	61.5	2	15.4
学生 C	教員評価	1	7.7	3	23.1	7	53.8	2	15.4
	自己評価	3	23.1	3	23.1	5	38.5	2	15.4

表4 アンケート 13 項目についての学生と教員による第6回の評価 (最終評価)

(評価と%)

最終評価/%		3	%	4	%	5	%
学生 A	教員評価	0	0	13	100	0	0
	自己評価	3	23.1	9	69.2	1	7.7
学生 B	教員評価	0	0	11	84.6	2	15.4
	自己評価	0	0	10	76.9	3	23.1
学生 C	教員評価	5	38.5	8	61.5	0	0
	自己評価	9	69.2	4	30.8	0	0

感したポイント]における代表的な記述を以下に挙げる。

第1回

- 自分の課題である、口の開き(大きさ、口角)や、表情(目の開き、笑顔)がまだまだ足りないと感じた。
- テンポを速くし過ぎると、ブレスで息を吸いきれず、表情もしっかりつけて歌うことができないため、歌が雑になった。

第2回

- 発声の際にあくびや驚き、笑いが出来ていないと曲を歌った時に反映されない。口角が下がることは、音程が下がることに繋がるので、笑いで口角を上げることを意識したい。
- 息が良く吸えていない。鼻からの吸い方を試して研究が必要である。
- 歌には、準備運動が必要で、ウォーキングや腹筋運動、呼吸練習の方法が分かった。呼吸練習

をすると、お腹で支える感覚が分かり、声が以前より安定した。

第3回

- 他の学生の目力や表情など、良いところを積極的に取り入れていきたい。
- フレーズに合わせて段階を踏んで口の開きや力配分を変えると、自然に曲の情景が目に見え、フレーズの山に沿って流れるように歌えるようになった。

第4回

- 奥歯を開け、口角を上げながら発声すると、自然と喉が開き、響きが高く飛ぶ感覚があった。今までは出来ないが無意識にブレーキをかけていたので、意識を変えたい。
- 声を頭の上から出す感覚が分かった。自分は喉で作った喉声が多いと感じた。発声練習を沢山する中で、舌が上がっていることに気が付いた。舌を下げるようにして歌うと、前より喉が

開く感じがつかめた。この体感を今後の歌につなげたい。

第5回

- フレーズの盛り上げたいところの口を大きめにするのが分かった。音程やフレーズに合わせて口の大きさを調整できるようになってきた。

第6回

- 毎回、前回の復習から入ってしまうため、レッスン後の振り返りを行い、言われたことや感じたことを、もう一度自分の中で考えて体得するようにしたい。
- 口形、驚き（表情）はフレーズの盛り上がりに応じてつける。一番の山場を考えて歌うようにする。
- 感情を相手に伝えるには、強弱の付け方など歌い方を研究することが大切である。
- 喉が閉まっている時には、あくびの態勢を思い出して、その状態の口の開き方にすると喉が開くことが分かった。歌でも声が詰まった時に応用することができた。

初回は、アンケートを用いて様々な観点から具体的に分析することにより、現在の問題・課題を明確に把握することができている。第2回目からは、その課題を克服するための具体的な技能の取り組みに入っていることが分かる。更に回を重ねる度に、ベースの課題は同じでも、新しい方法やより複雑な感覚を取り入れながら研究・試行錯誤し、未知の体感を発見してステップアップしていることが分かった。

(2) [4. レッスンでのキーワード]における、学生3名の代表的な記述を以下に挙げる。

深い呼吸 / 姿勢 / 自己管理 / あくび・驚き・笑い / 響き / 口角 / 「マ」のあくび / フレーズの足し算 / 息の神様になれば、歌が上手くなる！ / 喉を開ける、響きを当てる / 表情、など。

キーワードには、3名に共通するプレスと発声上の課題に関連した記述が多く見られ、その重要

性を認識していることが分かった。

(3) [6. レッスンを受けての感想]における第6回の代表的な記述を以下に挙げる。

- レッスンを重ねることで、出来ていないところや不足な点などの自らの課題が明確となり、今までは何をどのように直して、どのように練習したらよいか漠然としていたが、その様な事が無くなった。
- 他の学生の最終発表を聴いて、最初の演奏と比べて、とても成長を感じた。口形や発声の違いが一目瞭然で、安定していた。基礎の大切さを改めて感じた。口形や口を開けること、響きをあてることのバランスが考えられていて、表現の幅が広がった。
- ステージに立って歌って、やはり変化したのだと気付いた。例えば、プレスの吸い方は、同じ口から吸う方法でも、吸う音は静かで、ゆったり吸えていた。歌に余裕ができ、高い音や低い音でも安定して歌うことができた。
- 意識して実行したことは、成果が出る。学んだことをキャッチして、次までに直して、できた感覚を覚えて実行するようにする。
- 曲の表現は相手に伝わりにくいため、時々他の人に見てもらいながら練習したい。
- 最初の発表会では、全てにおいて基礎が不足していた。最終発表の動画を見て確認すると、息の使い方、喉の開き方、声の出し方、声質、声量も全く別のものになっていた。以前は歌うと辛かった喉が、今は全く辛くなくなり凄いなと思った。学んだことを次の曲に生かし、色々な曲を歌っていきたい。

最終回での演奏発表を終えて、学生3名は、自分自身の大きな成長、ステップアップ、何を体得したか、を明確に自覚・把握していることが分かった。これについては、評価アンケートの分析からも分かり、教員による評価の考察と一致する結果であった。更に、学生は一緒に学修を進めてきた他の学生のステップアップについて具体的に分析し、何ができるようになったのかを客観的に

認め、把握することができたことも分かった。

4.3 まとめ

ループリックとこれに基づいた評価アンケートを使用した声楽実技レッスンでは、アンケート結果から、学生による自己評価と教員の評価ともに90%以上に及ぶ1～3段階のステップアップが見られ、更に折れ線グラフの推移から、教員と学生の各回の評価判断も概ね一致していることが分かった。自己の歌唱レベル・状況に対する適切な判断、及び教員と学生の評価の一致は、学修及びフィードバックの効果を最大限に引き出した。このことから、これらのことはスキルアップのための重要な要素と推測できる。

レッスン記録からは、アンケートを用いて自己の歌唱や学びについて振り返り、様々な観点から具体的に分析することにより、現在の問題・課題を明確に把握した上で、研究・試行錯誤しながら新しい方法やより複雑な感覚を発見・体得し、自分で課題を解決してステップアップできることが分かった。また他方では、自分のできていることも自覚・把握することができ、自己の学びや能力について肯定的に捉えることもできることが分かった。

課題とする内容も、初回の呼吸法と発声法という基礎的な技能中心から、技能を応用した表現、表現するための技能と視点に移り、学修が深化していることが分かった。

また、この過程には、学生同士の協働による学修を取り入れた。他の学生の状況や課題についても批判的に思考して客観的に分析・把握し、解決のために必要な方法を考えて助言することによりステップアップしていく状況を見て、自分自身の知識や技能をより妥当なものとして認識し、更に深い体得に至るのである。また、優れた点については、真似て吸収することができることも分かった。教える学生は指導法とともに自分に不足な技能を吸収して学び、教えられた学生は、知識や技能を身に着けることができる。

ループリックと評価アンケートは、○目標と学

修内容を総合的に明確に把握することができる、○芸術の実技レッスンという主観的かつ抽象的な技能や表現の評価尺度を具体的に可視化し、学生と教員が共有できる、○この共有により、学生と教員が概ね一致した評価判断のもとに効果的に学修を進めることができる、○更に、この共有により、学生同士の協働による振り返りも行われ、お互いにステップアップすることができる、○アンケートを用いて自己評価・振り返りを行うことにより、同時に自己のステップアップも可視化することができ、学修者は、モチベーションを高く保ちながら主体的に学修に取り組み、適切なフィードバックを行うことができる、という利点があることが分かった。

以上のことから、ループリック及びループリックに基づいたアンケートを用いた声楽レッスンは、有効であることが分かった。

5. おわりに

本研究では、教員養成課程における声楽実技のためのループリックを作成し、これに基づいて声楽実技レッスンを実践し、ループリックの内容を細分化したアンケートを使用し、その有効性について検証、分析を行った。ループリックを学修の目標として位置付け、毎回アンケートを用いて自己評価を行った。その結果、学生が自ら現段階での状況を分析し、問題を明確に把握し、主体的に追及・解決しながら次の目標へと段階的にステップアップできることが分かった。また、ループリックとアンケートの組み合わせは芸術の実技という主観的かつ抽象的な技能や表現の評価尺度を具体的に可視化することになり、学生と教員が共通の認識・評価尺度をもって学修を進めることができ、同時に、学生にとってアンケートを用いた自己評価は、自己のステップアップも可視化し、モチベーションを高く保ちながら学修に取り組み、自己に対する適切なフィードバックも行われることが分かった。

さらに、学生は、共有した認識・評価尺度のもとに、実技レッスンにおいて協働による学修を取

り込むことになり、お互いに課題解決しステップアップすることも分かった。また、学生は指導法を身に着けながら、より深い知識・技能の体得に至ることが分かった。

以上のことから、作成したループリックとアンケートを活用した教育実践は、非常に有効であることが明らかになった。今後は、音楽表現（声楽）での一斉授業や初等中等教育の歌唱指導におけるループリックとアンケートを開発し、更にこれを活用した授業展開を工夫、研究していきたい。

注

1. 濱名篤 (2012) 「ループリックを活用したアセスメント」中央教育審議会高等学校教育部会 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afieldfile/2012/12/07/1328509_05.pdf (参照日 2018/8/8)
2. 高瀬健一郎 (2014) 「音楽実技科目へのループリック導入の試み「基礎器楽 (ピアノ)」における評価活動を題材として」『常葉大学短期大学部紀要』第 45 号, p.238.

参考・引用文献

1. 朝日公哉 (2013) 「ループリック活用による「音楽」の学習効果について—自己評価による主観性の可視化とその効果—」『論叢：玉川大学教育学部紀要』, pp.157-174.
2. 石垣明子 (2016) 「大学におけるループリック評価の開発 —医療人文学科目における社会人基礎力を涵養するループリック—」『つくば国際大学産業社会学部研究紀要』第 22 号, pp.27-39.
3. 沖裕貴 (2014) 「大学におけるループリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—」『立命館高等教育研究』第 14 号, pp.71-90.
4. 久保紘子 (2017) 「教科「音楽」におけるアプローチについての考察—ピアノ実技レッスンの事例を基に—」『論叢：玉川大学教育学部紀要』第 17 号, pp.187-200.

5. 小山英恵・近藤瞳・中谷華奈子・新角麻友・赤穂和幸・徐慧偉 (2016) 「中学校音楽科における思考力・判断力・表現力の育成を目指したループリックの開発—歌唱教材「荒城の月」の授業実践において—」『鳴門教育大学授業実践研究』第 15 号, pp.113-121.
6. 杉原了 (2016) 「クラシック音楽の演奏に関するループリックの作成」関西教育学会第 68 回 発表資料 https://kyoumei.jp/wp-content/uploads/2017/01/kansai-kyoiku-toru_sugihara-2016-1203.pdf (参照日 2018/8/8)
7. 高瀬健一郎 (2014) 「音楽実技科目へのループリック導入の試み「基礎器楽 (ピアノ)」における評価活動を題材として」『常葉大学短期大学部紀要』第 45 号, pp.225-238.
8. ダネル・スティーブンス, アントニオニア・レビ (2014) 『大学教員のためのループリック評価入門』佐藤浩章監訳, 井上敏憲・俣野秀典訳 玉川大学出版部.
9. 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」文部科学省 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (参照日 2018/8/8)
10. 中央教育審議会 (2012) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (参照日 2018/8/8)
11. 山田嘉徳・森朋子・毛利美穂・岩崎千晶・田中俊也 (2015) 「学びに活用するループリックの評価に関する方法論の検討」『関西大学高等教育研究』第 6 号, pp.21-30.
12. 横溝聡子・磯部哲夫・南川肇・深谷登喜子 (2018) 「音楽科実技科目におけるループリック評価の導入」『郡山女子大学紀要』第 54 号, pp.179-194.
13. 吉田武大 (2012) 「アメリカにおけるバリューループリックの活用動向」『教育総合研究叢書』第 5 号, pp.103-111.